

第 41 話〈藤じいさん〉の要約と参考資料

第 41 話〈藤じいさん〉の要約

江戸時代後期、土呂久谷を見おろす道元越に引っ越して来た一家がありました。焼いた炭を外録銀山に売って金を貯め、休山していた鉱山周辺の土地を買い占めました。鉱山が再開すれば、土地を貸し、働きにでて、故郷に家を再興する資金をつくるのが目標でした。

第 41 話〈藤じいさん〉の参考資料

4 1 - 1 藤治郎

墓碑より

佐藤力次 (*戸籍では利喜治)

俗名 父 藤治郎

年 84 才

明治 36 年 5 月 29 日

*行年 84 歳を数え年とすると、生まれた年は 1820 年 (文政 3 年) になる。

小林仁市郎さんの話 (1976 年に聴取)

古い話ですが、母 (義母スギ) がよく話しておったです。喜右衛門の父利喜治が 5 つのときに、この部落 (現延岡市北方町三ヶ村) から生活に追われて、土呂久の三弥舗に鉱山の仕事があるからといって引っ越していったとです。藤〇〇というらしいけど、藤じいさんと言っていました。土呂久に墓石がありまして、名が入っています。子供は 3 人じゃなかったですか。乳飲み子と 3 歳と 5 つの利喜治。そのころ藤じいさんの家が火災で焼けて、近くの牛の口に小さな小屋かけしてやっていたが、子供が 2~3 人できて、銭とりもあるし、鉱山に行きなさったじゃろと思うのだが。

昔、三ヶ村から槇峰へ越して、槇峰からカバキ峠を越えて舟の尾に出る。そこから日之影へ行き、宮水、七折、野方野を通って土呂久へ行ったものだ。槇峰へ行く途中の尾根を超すとき、竹摺^{たけずり}峠がある。その峠で藤じいさんは息子の利喜治に「また三ヶ村を見ることなかろうぞ」と言うたという。あと 2 人の子供は、1 人は上野村へ嫁入りしたと聞かす、あとの 1 人はどうなったかわからん。

利喜治じいさんが嫁を上野からもろうて 1 人子供ができたが、奥さんは間もなく死んだ。藤じいさんは、故郷の三ヶ村が恋しくて、こちらに高見家に出戻り娘 (モヨ) がいると聞いて、息子の後沿いに連れて行った。また鉱山の仕事に三ヶ村から出かけて行った高見三右衛門が利喜治の長女スミと結婚するし、スミさんの妹スギさんが小林家に来たとき、利喜治は「また三ヶ村に来た」とこもごも言った。2 人の娘が嫁に行くとき「本当の

故郷は三ヶ村ぞ」と、昔話をよく聞かせたそうだ。

三ヶ村は明治以前は田はなかった。畑と焼畑をもって林業本位の仕事をしていた。火災におうたとき、部落の何軒かが焼けたんだろう。「火元は他人より先に家を建ててはならん掟」があったらしい。「一軒焼けると太るが、類焼が多いと焼けつぶれる」というように、山と土地を分家に譲って出たらしい。

藤じいさんが行ったのは、明治よりずっと前、慶応より前、土呂久が栄えたところで「土呂久かな山は金山や」という評判じゃったらしい。北方から、小さいかご一つ持って行って掘っただけで1年遊べる人がおった、という伝説もある。鉾山が栄えたところへ行くと、なんかあるんじゃないか、という夢をもって行ったんでしょう。三弥の伝説の夢を買う話は、土呂久の繁栄のシンボルでは？

藤じいさんが行って、幾年もせんうちに閉山して、また山仕事を始めた。山を買い集めて、坑口のある付近を買い占めてしまった。よく炭焼きをする人で、雪の積もつとるときは炭焼き、夏は2尺もの切り株を切ってヤボ作（焼畑）でトーキビ、キビ、ヒエ、アワやらつくる。ヤボ作は、冬の間切って枯れたのを、夏に作付けするとき焼いて、すぐ薪つける。3～4年は使われた。人よりよく辛抱する人だったから、鉾山がやまって、山も安かったんでしょう。

佐藤義雄さんの話（1978年4月21日聴取）

藤治郎窯は明治よりずっと前、鉾山が木炭を使うころつくられた。木炭は、ふいごのかね吹き、あるいはノミを焼くのに使いよった。「かこい」より少し西に寄ったところに、大きい窪がある。そこに木が立っていた。藤治郎さんは、その木を炭に焼いて鉾山に納めよった。藤治郎の後を利喜治じいさんがやりよった。窯の付近に屋敷があった。これを藤治郎屋敷といった。藤治郎屋敷から鉾山まで4キロの山道。人間が踏みたてた道。今の林道沿いに北へ行き、長石の尾羽を越して通った。1時間たあいわんかかりよった。畑もなにもないとですよ、その付近には。ヤボ作というて、山を切り開いて、トーモロコシつくったり、大豆、小豆をまいたりしよった。畑はできん。掘り開くのには苦勞する。

道元越から藤治郎屋敷までわりあい近い。道元越は、下がずっと窪で平らになっているので、距離にして500～600メートルでしょうね。

4 1 - 2 鉾山周辺の土地所有者の変遷

明治36年5月29日 藤治郎死亡

明治36年11月24日 佐藤利喜治、宅地214.87平方メートル（百熊屋敷）取得

明治39年10月10日 佐藤利喜治、宅地178.51平方メートル（のちの鉾夫長屋）取得
畑1276平方メートル取得

原野12892平方メートル取得

原野・山林・畑・田約 3 万平方メートル取得
明治 43 年 8 月 2 日 佐藤利喜治 宅地 56.19 平方メートル（喜右衛門屋敷）取得
合計 45769.57 平方メートル（約 4.5 町）

4 1 - 3 佐藤喜衛門一族の略年表（亜ヒ酸製造開始まで）

- 1820（文政 3） 藤治郎、三ヶ村に生まれる
- 1851（嘉永 4） 利喜治、藤治郎の長男として三ヶ村に生まれる
- 1853（嘉永 6） 内藤政義、外録銀山を視察
- 1855（安政 2） 藤治郎、家族を連れて三ヶ村から道元越（土呂久畑中）へ
- 1879（明治 12） 土呂久鉦山の所有者、熊本土族から鹿児島土族へ
- 1880（明治 13） 喜右衛門、利喜治の長男として生まれる
- 1885（明治 18） 百熊、利喜治の二男として生まれる
- 1890（明治 23） 和合会創設（盟約公衆 35 人の中に「佐藤利喜次」とある）
- 1894（明治 27） 山口県阿武郡の竹内令さく（貝へんに乍）外録鉦山で採掘始める
- 1903（明治 36） 藤治郎没
利喜治、土呂久鉦山周辺の土地購入開始～1910 年まで
- 1905（明治 38） 喜右衛門、サキと結婚
- 1918（大正 7） 竹内令さく、鉦種にヒ鉦を登録
- 1920（大正 9） 利喜治没（5 月 2 日）
土呂久鉦山で亜ヒ酸製造始まる

4 1 - 4 三ヶ村

死につぶれ（川原一之著「辺境の石文」P73~74）

宮崎県東臼杵郡北方町三ヶ村は、土呂久と同じように、祖母・傾山系の山壁深く分け入った谷間の集落である。延岡市から五ヶ瀬川沿いの国道 218 号を西へ約 20 キロ、八峽から北へ折れて 4 キロ、山肌へへばりつくようにして点々と農家がある。ぼくは 1976（昭和 51）年 1 月、喜右衛門の祖父藤次郎が捨てた三ヶ村を訪ねた。喜右衛門の妹スギの養子、小林仁市郎さん（明治 41 年生）に会った。

「古い話ですが、養母のスギがよく藤じいさんのことを話しておったのです」。仁市郎さんはそう言って、竹摺峠の情景を物語ってくれた。だが、藤じいさんの正式の名前はとも思い出せない、と首をひねるばかりだった。この一族にとって、家系図を語り継ぐよりも、竹摺峠の一コマを記憶にとどめる方が重要だったのではないか。「もう二度と、三ヶ村を見ることはなかりうぞ」。代々伝えられたこの言葉は、単なる出郷の感傷ではあるまい。藤次郎の悲願がこもった、切ない家訓のように思えてくる。

仁市郎さんの話を聞いた2か月後、ぼくは竹摺峠を訪れた。陽春の峠に、谷を渡るウグイスの声が響いた。遠くに蛇行する五ヶ瀬川の本流が見え隠れし、数百メートル下の谷間に三ヶ村の人家がかたまっている。峠の反対側に、美々地と槇峰の部落をへだてて、山々の尾根が幾重にも重なって見える。三ヶ村から土呂久まで十里の山越えに、まる一日かかったという。峠を越えて異郷へ落ちていく藤次郎の無念さは、一旗上げて郷里に帰るとき、初めて晴れるものだったろう。

4 1 - 5 三ヶ村訪問記 (2019年11月24日)

八峡から北2.5キロに三ヶ村

国道220号を高千穂方面に向かう。延岡市北方町八峡で五ヶ瀬川の本流から離れて、右(北)へ折れて、支流に沿った道にはいる。八峡の人家を通り過ぎると、銀杏の黄色い落葉をしきつめた山道になる。八峡から約2.5キロ、三ヶ村公民館の前にバス停がある。公民館に駐車して(運転手:佐藤哲郎)、近くの家で小林さんの家を教えてもらう。狩底、内の口、桑の木の3つの集落を一つにしたのが「三ヶ村」。現在は、全部で16軒。家が集まっているのが狩底。そこから道なりに進む。橋のある所で右に川を渡ると、内の口。そこで橋を渡らず、なお道なりに行くと、谷筋を過ぎて、急な山道にはいり、人家が見える。そこが、桑の木の集落で、「小林家」が2軒ある。

新屋:小林裕俊(ひろとし)さんの家

川沿いの道から左にカーブして山道をのぼっていると、右に屋根が見えてきた。家につづくのか、狭い道を少しのぼると、家があり、玄関先に軽トラックがおいてあった。「こんにちは」と声をかけるが、誰もでてこない。留守である。狭い道を戻ろうとして、右側に立派な墓が立っているのに気付いた。正面に「小林家之墓」、右側面に「平成四年三月吉日 / 小林仁市郎 / 長男昭 妻クスエ 建之」と刻んでいる。43年前に藤じいさんの話を聞いた、小林仁市郎さんは27年前に亡くなっていた。そのときに、話を聞かせてもらったのは、この家だったのか。

(仁一郎さんの孫の裕俊さんは、専門学校や高校の臨時講師をしている、と隣の家の佐藤玲子さんから聞いた)

本屋:小林仁市郎の姪の佐藤玲子さんに会う

仁市郎さん方から、さらに道を登ったところに、1軒家が建っていた。「テレビのポツンと一軒家みたいだ」と哲郎君がいう。雨の日なので、台所と思われる部屋に電気がついている。声をかける。女性がでてきた。「40年くらい前に小林仁市郎さんから土呂久の話を聞いた者です」と挨拶すると、女性はすぐに「土呂久」に反応し、「うちたちのかあちゃんのかあちゃんがスギという名で、土呂久から嫁に来た、と言っていました。私の母は

隣（仁市郎方）から嫁にきた。母は7、8年前に亡くなったが、亡くなる前に、母の妹たちと土呂久に行って上の方に登った。墓が何基かあった、と言っていた」。雨が激しくなり、雷鳴がごろごろと響く。「この谷は雷がよく落ちるそうです。中に入りましょう」と、家の中に入れてくれた。名刺をだして挨拶する。女性も名刺を返してきたので、こんな山奥に住んでいる人が……と驚く。表に「山里三ヶ村玲 / 佐藤玲子 / 宮崎県延岡市北方町三ヶ村午96番地」、裏に「*曇のへりのバッグ*着物・帯のリメイク（ダンスに眠っている 思い出の帯・着物をリメイクしてみませんか!）」とある。埼玉県から父の介護に実家に戻ってきて10年。この山の中の一軒家で、埼玉でやっていたリメイクの手作業をつづけているとのことだ。「携帯電話はよく聞こえなくなる」といいながら、誰かに電話で話した。「土呂久のことで男の人2人が調べに来ている」。そこで、「調べに来たのではない。いま、三ヶ村で土呂久のことが語り継がれているかどうか知りたかったのと、もう1回、竹摺峠から三ヶ村を眺めたくてきました」。「私が子供のころ、記者が調べに来たと聞いたことがあった」「それが僕です」「私も知りたい」「喜右衛門一族のことを書いたエッセイ（『死につぶれ』）があるので、コピーして送らしましょう」。雷は鳴りつづけていた。横の窓ガラスがぴかっと縦に光った。0.5秒くらいして、ドーンと大きな音が響いた。玲子さんは、家の電気がやられなかったかと、炊飯器を見に行く。大丈夫だった。「こんな近くに落ちたのは初めて」と哲郎。竹摺峠の話になる。「向こうの山のとっぺんが竹山（細い竹が茂っていた）になっていて、そこを『竹ずる』と呼んでいた。（竹摺峠の名前は聞いたことがないという顔をした）。保育園から小・中学校まで、三ヶ村から峠を越えて、美々地・槇峰の学校に通った。2か所に谷があり、小川に大きい石が置いてあって、そこを渡った。台風ときは、三ヶ村の者だけ休校、早退になった。夏休みが終わる前の日は、父親がでて道の草刈りをした。今は、誰も通らないので、草にふさがれて峠に行くことはできない。槇峰銅山の煙害で山ははげ山になっていた。川をオレンジ色の水が流れていた。美々地に親せきの家があったので、雨にぬれると、そこで着替えをして三ヶ村に帰った。高校の同級生が椎葉から遊びに来て、こんな山の中で暮らしているのを見て、安心したと言っていた」。それほど山奥にある家なのだ。